

「学生が互いに啓発しあう教育とは」

鵜飼 孝造（社会学科教授）

1. 「教育学的想像力」の貧困 — かつて大学は夢を売る場所だった —

本日は社会学部FD研究会&教育GP成果報告会にお集まりいただきましてありがとうございます。教育GPを申請しましたのが2008年春で、3年近く前です。春の連休前に教育GPに申請してみないかという話をいただきまして、その結果、3年も教務主任を続けております。予算が下りたのが2008年末で、以来2年あまり、先生方にご協力をいただきまして、総額4000万円近くの予算を使って、いま終わりつつあるところでありまして、本日はその成果報告会をしようということです。詳しい成果および評価については教育GPのホームページ(<http://ssgp.doshisha.ac.jp/>)に全てを逐一アップしておりまして、そこに全てが詰まっております。本日は私が最初に大まかな話をさせていただき、メインは各学科から取り組みの事例として、それぞれ特徴のある報告をしていただきます。そして、後ほど皆さまからご意見、ご批判をいただきたいと思っております。

この教育GPは、「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム — 学生による評価と相互チュータリングの試み — 」というテーマで申請しましたが、やや短くしまして、本日は「学生が互いに啓発しあう教育とは」というテーマにさせていただきました。近年、大学でもFDが盛んに言われていて、教員がもっと教える力をつけないといけないということはわかるのですが、話が形式的なことに向きがちで、私が教務主任の間は、1 Semesterで授業を15回しないといけない、シラバスを詳細に書きなさいとか、授業が終わった後で採点する際には授業講評を書きなさいとか、皆様にたびたび申し上げて恐縮でした。社会学には「社会学的想像力」、ソシオロジカル・イマジネーションという言葉がありますが、私に言わせると今はむしろ「教育学的想像力」が貧困になっているのではないかと。瑣末なことばかりが問題になって、一体、私たちは大学で何を教えるべきなのか、どういふ教育をしたらよいか、答えは一つではないと思っておりますが、大きな話があまりにも欠けていて、石田光男先生が以前、「大学はかつて夢を売る場所だった」とおっしゃっていましたが、大学って格好いいところで、大学で勉強したらこんないいことがあるという、夢のある場所のはずだったのですが、最近、オープンキャンパスに来られる受験生の話を聞くと「ここではどれくらい、どんな会社に就職できるのですか?」ということばかりを尋ねられて、ちょっとうんざりしているというのが正直なところでは。文句を言いながらも、教師というのは自分自身が教わったやり方の外側になかなか出ることができない。自分が教わった範囲でしか教育を語れないという限界がある。そこからしか教育を具体的に考えることができないという矛盾があると思っております。私自身、大学に限らず中高生時代も優等生ではなく、端っこの方にいた人間なのですが、余所者として大学教育というのを見てきますと、最近、導入教育の充実が言われるのですが、1・2年生を中心とする教育はそれまでは教養教育、あるいは一般教育と言われていまして、大学教育の中でどちらかという端っこの方に追いやられて、むしろ専門性が大事だと考えられてきたと思っております。

私が大学に入ったのは1978年でした。全共闘、現在60歳過ぎくらいの人たちがさんざん暴れた後、大学が廢墟のようになった時に大学に入学して、自分を「全共闘の焼け跡・闇市派」なんて

自称していますが、私が大学に入った翌年1979年から「共通一次試験」が始まりまして、日本の大学は画一化、大衆化、さらに都市社会学的にいうと郊外化ということが一気に進んでしまったわけです。私は大阪大学に入ったのですが、その時のことを思い出すと「石橋(教養部があった豊中キャンパス)の上にも3年」という言葉がありまして、2年で急いで教養課程を終えなくても3年ゆっくりしたらよいではないかという意味で、しかし自主的に3年しなくても、教養課程は厳格に採点されていて、3年生に進級するのめげっこう難しく、私の同級生には石橋の上に4年、(専門課程のある)吹田に4年、8年フルにやったような「強者」たちもいました。吹田キャンパスは郊外化の中で生まれたキャンパスで、1970年の大阪万博のバス駐車場跡地のアスファルトに駐車線が引かれた上にそのまま校舎が建っている状態で、緑も何もなくてちょうど受験の季節になると寒風吹きすさぶような構内で、当時の学生たちの間では「千里シベリア流刑地」などと言われていました。石橋の上にも3年、さらに千里シベリア流刑地ということで、今から思うと、主観的には大学に2回行ったなあという感じなのですね。「一粒で二度おいしい」最初にチョコレートを食べて、それから噛んでいくとアーモンドが出てくる。石橋と吹田は全く異質で、先生たち同士も仲が悪いし、たまに千里の先生が石橋に教えに来ると「あの人たちが言っているのはねえ、、、」と散々悪口を言って帰るとか。教養の先生も「君らどうせ千里に行ったら、しょうもない話を聞かされるから、今のうちにちゃんと勉強しておけよ」という話を散々聞かされまして、でも異なる二つの文化の中で、2つの別の大学を体験できたようで楽しかった、最大限、積極的に評価すると、そうとも言えるわけです。

私は専門課程では人間科学部にいたのですが、それをつくった中心人物が甲田和衛先生で、うちの社会学科の森川眞規雄先生の先生なのですが、その甲田先生は「旧制高校」をモデルに人間科学部を構想されているのです。日本の大学で、大正から昭和にかけて生まれた世代の人たちにとっては、一つの理想として「旧制高校」があって、1学年100名、文理融合という幅広い教養教育の上に大学の専門教育が築かれるべきであるということで、人間科学部の3・4年生は専門課程のはずですが、文理融合っぽくて統計学も勉強させられて、難しいハイデガーとか現象学を論じる先生もいて、両方できないといかんとされていました。今から思うと、石橋の教養の次に(学際的な)人間科学部があり、さらにその上に大学院課程を据えるというのは一つの先見の明だったなあと思うのですが、当時の私たちにはその意義を理解できるはずありません。

その後、私は助教授として北海道大学に赴任したのですが、まさに北大の教養部と学部の間は「仁義なき戦い」という感じでした。教養部の組織を解体して、それぞれの学部にも所属している教員が教養部に自分の専門の基礎を教えに行くというシステムで、それを「北大方式」といっておりました、日本全国の国立大学を中心に教養部をなくそう(そのうえで大学院中心の大学に改造しよう)という動きが起こった時に、北大方式はその先頭を走っているのだと北大の先生は自慢していたのですが、実態はどうだったか。主に私たちのような若手教員が教養部に教えに行かされるのです。年長の教授たちは「学部・大学院でもっと教えたかったら、教養部で学生を集めてきなさい」とおっしゃる。大雑把にいうと、東大もそんなところがあると思いますが、文系と理系でざっくり入学させて、1・2年の教養部の成績順に入りたい専門の学部・学科に進学できることになっていまして、学生からすると点とり虫にならざるを得ず、異常なまでに裏ガイドみたいなものが発達していました。他方、教員からすると、各学科・専攻の新3年生の集まりが悪いとか、点数が低いと、「君たちがちゃんと教えていないからだ」「講義が面白くないからだ」と叱られまして、ひどいところやなあ、と思ったわけですね。教養課程にはリベラル・アーツという意味があるはずですが、ちっとも「リベラル」ではなく、専門の下請けみたいで、「リベラル・アーツのはずが、ちっとも幅広い教養になっていないじゃないか」と言いたくなるようなことが多々ありました。

その後、神戸の甲南大学に転じたのですが、甲南学園をつくったのは平生鈇三郎さん(1866-1945)という人で、その人は三菱財閥の番頭格のような実業家(後に広田内閣文部大臣、枢密顧問官)で、神戸の住吉周辺に住む財界人の子弟等を集めて、息子の平生太郎さんが幼稚園に行く年齢になると甲南幼稚園、小学校に上がると甲南小学校を設立し、とうとう当時の私立では珍しい中高一貫の旧制高校をつくられた訳です。現在、東京にある武蔵とか学習院とか成城とか成蹊とかも、前身は私立の旧制中高一貫校でしたが、まさに甲南学園はそのさきがけでした。平生さんは官学優位の風潮に反発し、戦時中にも自由主義を守り、イギリスのパブリックスクールを範にして、国際社会に通用する教養豊かなジェントルマンを育てようとした。そこから当時の東大や京大などの帝大とか、アメリカの大学に進学した人も多く、戦後から現在に至るまで、旧制甲南学園出身の文化勲章受賞者や学士院賞受賞者を多く輩出しています。教養教育の果実を得るには実に半世紀以上かかるという例だと思いますね。平生さんの死後、戦後にできた新制甲南大学の人たちもプライドを持っていて、人格教育、教養教育をきちんとやらないといかんと、私が在職していた時も、1年生からクラス担任制といって、学生の管理を担うのは職員ではなく、あくまでも教員中心でした。各先生が1学年15人くらいのクラス担任になって、相談に乗ったり、たまにはコンパでもしようかと学生を集めたりする。1年生は慣らし期間で、2年生から広域副専攻というのがありまして、2年生から専門課程と並行して教養課程をやるという(各教員が他学部の学生たち向けの授業を担当する)制度だったのです。専門課程でも、例えば社会学科の社会調査実習とかはチームティーチング制になっていて、3、4人の教員が共同で1クラスを持つ。私が教えていると、後ろで年配の先生が聞いておられて、「鶴飼君の教え方はちょっと、あそこがいかな」なんて、後で怒られたりして。教える側にもそういう面白さや学びがあったものです。

その後、私はこの社会学部が開設された2005年に同志社大学に赴任したのですが、当初はまだ1・2年生は京田辺校地に、3・4年生は今出川校地にいて、その後、今出川校地に統合しようという話が起こって、2009年度からそれが実現したわけです。私は、正直に申しまして、同志社に来た当初、同志社の教育はひどいなと思ったのです。なぜかという、学生たちは京田辺校地で一般教育を受けているのですが、専門課程から見ると、事実上、1・2年生は野放しなのですね。ある先生が今出川に来た新3年生を見てしみじみ「1・2年生は野性児で育てはるから」と言われた。野放しにしておいて、ポンッと今出川校地に来て、もう3年生の秋から就活が始まってアツという間に卒業していく。それを見て、これははっきり言って詐欺だと思いましたね。例えば同志社大学社会学部社会学科に入ったはずの学生が、実際に、社会学科らしい教育を受けているのは3年生の春学期、せいぜい正味3カ月なのです。だからこれはひどいと思ったわけです。もちろん、同志社大学に長くおられる先生からは色々と反論もあるとは思いますが、それが私の率直な感想だったのです。

それで教育GPを始めた時に「4年一貫教育を」と言ってしまったのです。1年の導入教育、2・3年の基礎教育、4年の創造教育と銘打って、学生が4年間を一貫したカリキュラムのもとで勉強できるようにすれば、もう少し京田辺と今出川の間にあった断絶を埋めて、上手くいくのではないかと思ひ、やってみたわけです。しかし、思い返せば確かに北大も甲南も立派なキャンパスに統合されていて、その中で4年間、学生たちは勉強していたのですが、それは良い教育なのだけど、実際には教員がしんどい。自分の研究はしないといけないし、学生は1年から4年まで、さらに大学院まで持っている。若い先生しか、身がもたない。そんなジレンマを一貫制だけどもう少し学生の自発性を活かし、上級生と下級生を繋ぎながら、もっと上手く工夫して教育できないかなと思ってチューター制というものを考えたのです。ただし、私は一貫制がよいと考えたのですが、少し思い

違いだったと反省している点もあります。(京田辺を経験した最後の学年である)新町キャンパスにいる4年生に話を聞くと、結構、多くの学生が「タナベがよかったわ。イマデは窮屈や」なんて言う。今出川キャンパスが物理的に狭いというスペース的な制約もあるのですが、大学にはもっと広い意味で「スキマ」というか、解放区的な要素が必要なのかなと、つまり「4年一貫制」というだけでは、逆に学生たちにとって窮屈なのかなと反省しています。

もう一つ、今の学生を見て思うのは、4年生のゼミで卒業論文に取り組む時に、なかなかエンジンがかからないのはなぜかということです。4年生の5月には内定をもらう学生が多いのに、その後もなかなかやらない。怠けているとか就活が忙しいからではなく、その時点でやっと落ち着いて、自分は何がやりたいのか、自分探しを始めるのです。自分で自分がわからないということにやっと気づくというわけです。実際に、就活が終わって、せっせせっせと授業に出始める学生がいます。単位にもならないのに「先生の社会学概論を1年生の時にあまり聞いてなかったし、出席もしていなかったけど、4年生になると面白いですね」と。本当に単位を取ったのかなと思いつつながら学生の話の話を聞いているのですが、4年生になってやっと好きな勉強を始めて、卒業間際になって「大学4年間、もっと真面目に勉強しておいたらよかった」というのだけれど、そんなの手遅れやと内心思うわけですね。ですから、一貫制というか連続性ではなく、実は断絶というか、大学の中にスキマ、通過儀礼として、ひとつを乗り越えるような、石橋から千里へとか、北大方式とか、ちょっとしんどい目のハードルをつくってあげることで、学生はそこで自分がやりたいことを考えるのではないか。就活や進学が自分探しの始まりではまずいでしょう。この教育GPでは、そのあたりの工夫が足りなかったな、と反省しているわけです。(「通過儀礼」には、現在本学で展開されているプロジェクト科目、あるいは各学科の実習やフィールドワーク、さらには留学体験やインターンシップなどが考えられます。もちろん、ここではチューターを体験することでも自分が何を学びたいのかを考えて欲しいのですが。)

この20年間、日本の大学は大学院重点化、教育研究の高度化と一方で盛んに言ってきたのですが、私の少ない見聞では、海外のトップクラスの大学を見ても、日本のように、学部レベルで専門縦割りになっているのかというところではないようで、もう少し緩やかに様々な分野を学ぼうと、4年間が教養課程的になっていて、むしろそれが世界のトレンドなのかなと思います。社会でも、大学卒業生に基礎学力、表現力、語学力がまず求められ、幅広い問題提起力が問われて、現在の大学の専門教育と社会的要請はうまく結びついていない。社会のニーズに応え過ぎるのはよくないという意見もあると思いますが、そこに大学の今の教育と社会とのギャップ、学生がすんなりと、勉強したらよいことがあるのだという夢を持ってない背景があると思います。

そこで、本日の中心テーマの相互チューター制なのですが、学生同士や、先輩が後輩に教えてあげようというのが趣旨ですが、石田光男先生は教育GPを申請する際、「大学で学問することが、自分の学生時代には格好いいことだった。目の前で先輩がアジ演説をぶったり、先生と議論したりという光景を新入生の時に見て、格好いいと思った」と話されていました。沖田行司先生も寺子屋の研究で「寺子屋の先生はそんなに頻りに教えるのではなく、座っているだけのことが多く、上の歳の子が下の子を教えているが多かったのですよ」と教えてくださって、そういう要素が今の大学に欠けているのかなと思うわけですね。昨年3月に卒業した同志社女子高校出身の学生が私のゼミに5人いたのですが、(中学校から10年間一緒に同志社で学んだ)5人の学生が言うには、「KYという言葉は私たちから生まれたんですよ」と。「あるクラスメイトがあまりにも周りの空気を読めないで、その学生のイニシャルにひっかけてKYと言っていたら、ラジオが取り上げ始めてアツという間に全国にKYという言葉が広まったんです」と自慢していました。本当かどうか

わかりませんが、彼女たちは横の人間関係にはとても気を遣うのですね。卒業生アンケートでも、9割以上の人が同じ学年、同じ学科には友達がいると回答する。ところが、「上の学年、下の学年に知り合いがいますか？」と聞くと、半分もない。少ないけれども、自分たちと異なるグループと繋がっている学生たちは大学生活への充実感が高いし、成績も良いという結果が出ています。チューター制でやってみると、確かに下の学年に教えたい、話したい学生が一定数いることがわかりました。私も今年度、「ファーストイヤーセミナー」でチューター制を実施しました。自分の横にチューターになってくれる学生が座っていたのですが、皆、私の言うことを聞いてくれない。でも3年生のチューターが話をすると、皆の視線が一斉に向いて悔しい思いをしたくらいですが、そういう風に1年生にとって上級生は教員よりも話を聴きたい存在なのですね。そこでチューター制が上手く活かさないかなと思ったわけです。私はチューター制を何かのきっかけをつくる制度だと考えておりまして、教育GPでは実験的にアルバイト代を渡したのですが、本来渡さなくてもよいかもしいないし、渡すべきではないのかもしれない。チューターをやっている学生もお金をもらっているから余計ややこしいわけで「お金がなくてもやりますよ」という学生が産業関係学科に何人かいました。それを聞いて感動したのですが、ただ「君だけに払わないわけにいかないのでもらって頂戴」と言って渡しましたけど。今後チューター制を、どのように制度化していくのかではなく、いかに「脱」制度化しながら社会学部の教育に活かしていくのが、私がこの2年間に抱いた問題意識です。

私の話はこのあたりで終わりにしまして、さて次に「5学科体制は独立王国か ― 存続選択なら一層の個性化を ― 」ということで、各学科の先生から活動報告をしていただきます。教育GPの学部共同実施を通じてわかったのですが、やればやるほど社会学部の5学科はそれぞれ歴史も個性も違うのだと思い知りました。これを一つにまとめことは不可能であると確信しました。しかし、5学科それぞれが独立王国として存続するためには、対外的にそれでは何をする学科なのか、という部分も訴えていかないといけないと思うのですが、そのあたりも含めて、まずは社会福祉学科の空閑浩人先生からお話をいただきます。

～．～

2. 5学科体制は独立王国か ― 存続選択なら一層の個性化を ―

社会福祉学科における教育GP活動報告
－2009・2010年度のチューター制度の取り組みを中心に－

空閑 浩人（社会福祉学科教授）

教育GPでチューター制度を実施したわけですが、私自身が一番感じたことは、1回生にとって上級生は教員よりもずっと話を聞きたい存在だということ、チューター制の取り組みをおこなってみて、そう感じました。裏返して言えば、特に1・2回生の場合には、それだけ話をする機会が、クラブの先輩とは違って、学科の3・4回生から改まって話を聞くとか、勉強のことで相談するのは、意外とないのかなと感じました。

チューターを募集して、チューター会議を年2回おこなって、チューター企画を学生たちにしてもらったりする際の際、お知らせ文、お願い文を、本日の配付資料に掲載していますのでご覧ください。チューター向けのものを抜粋しております。これらを見ていただくと、社会福祉学科が今回の教育GPのチューター制度でどういうことを実施したかがわかっていたかと思えます。チューターを募集して、チューターの対象科目として、今年度の1年次科目「ファーストイヤーセミナー」を春学期で、「社会福祉学基礎演習Ⅰ」を秋学期で設定しました。社会福祉学科は火曜日1講時にこの授業をおいて小クラス7つでおこなっていますが、全て同一時間で実施しています。合同の授業をする時もありますし、この日は全体でやりましょう、この日はクラスごとに分かれてやりましょう、と全体での合同授業とクラスごとの授業とを織りまぜたかたちで授業を進めていく。チューターの諸君には4回生のゼミから出てきていただいて、チューターのメンバーがそれぞれの小クラスへと入っていただく。全体の授業の時には、それに出席してもらうかたちで手伝ってもらいました。

具体的な仕事の内容について、チューター会議で説明をして、こんなかたちで調べたり、発表したり、相談に乗ってあげてくださいとお願いしていました。特徴的な取り組みとしては、チューター企画を社会福祉学科でやったのですが、春学期の最終日と秋学期の終わりと1回ずつ、4回生に企画してもらいました。春学期はシンポジウム「私の学生生活を振り返って～1回生に伝えたいこと～」。7、8人のチューターが一人10分ずつ、レジユメを作って発表してもらいました。授業に限らず、サークル・遊びも含めて、学生生活、夏休み等、どう過ごしたか。今から振り返ってこんなことをしておけばよかったとか、学生に伝えたいことを自由にしゃべってくださいと伝え、話をしてもらいました。結構、評判がよく、1回生からも「よかった」という感想をたくさんもらいました。

同じ様なかたちで、第2弾シンポジウム「私の卒業研究を振り返って～大学で学ぶということ～」。これは卒業論文を書き終えた後なので、自分の卒業研究について1回生に自分が何を卒業研究としておこなったかを語る。それをとおして、大学で学ぶということはどういうことかを4回生のチューターなりに1回生に伝えてくださいとお願いしました。今度は、アカデミックな方面に重点を移してシンポジウム形式で発表してもらいました。日常的な小クラスの授業に入って相互にアドバイスすることもあります。年2回の企画が1回生にとっては参考になったという感想をもらっています。

昨日、1年間の授業が終わりましたので、全体で担当教員とチューターメンバーで振り返りの会を持ちました。チューターのメンバーがホームページに活動記録を書いているものからの抜粋を載せています。その中で、なるほどと私自身が感心させられたのが、1人目の「自分の立ち位置が難しかった」ということです。「先生と1回生との間でどういう立場で授業に入っているのか悩みながら」、自分がどの辺の立ち位置をとったらよいか、悩みながら、それは我々も試行錯誤で、チューターにどうやって入ってもらうのがよいかを考えました。その辺は本当に悩みながらだったので、

試行錯誤の2年間だったなと思いました。4人目の学生のコメントも印象的です。「二つのことを感じました。一つ目は、社会福祉の勉強の連続性」と書いています。1回生に伝えていく、自分も3年前に受けた授業だが、改めて社会福祉を学ぶということ、奥深さ、果てしなさを考えさせられたと言っています。それと、「二つ目は、チューターという明確でない存在定義の役割をこなす難しさです。求められているものを感じながら、範囲内でやるべきことをやるのは試行錯誤でした」という感想を言っています。先程の学生と同じ様に、そのあたりをはっきりとしたアドバイスというかたちで伝えてはいませんでしたので、共に試行錯誤しながらだったのかなと思います。小クラスを担当いただいた先生からは「チューターがいることによってクラスの安定感、安心感、緩衝剂的な役割を担ってもらった」という意見をいただきました。以上が、チューター制度の取り組みの報告です。

その他として、学生委員会という学生の組織が社会福祉学科にあります。教育GPの予算的なサポートもあり、学生委員会がイベントを企画しました。ホームページに掲載されているものからの引用ですが、車椅子バスケットの社会人チームを招いて講演会、交流会を企画させていただきました。教育GPから予算をつけてもらって大きなイベントができました。3回生が中心になって企画して、1・2回生に提供するイベントですが、他学部・他学科生にも呼びかけたいということになりました。多くの学生に「福祉」を身近に感じて欲しいという思いから企画を実施することで、自分たちの社会福祉学科のアイデンティティを確かめていく機会にもなったかと思えます。

最後に、この2年間、相互チュータリングの取り組みを、社会福祉学科の中で担当しておこなってきましたが、正直大変だなと感じました。しかし、それなりに2年間やらせていただいて、こういう風に4回生が入ることによって、意味がある、相互チュータリングが機能するための仕掛けや働きかけの方法、こういう風にしていったらよいのかというのが何となく見えてきたかなと思っております。続けられるのであれば、さらによい方向でやっていけるかな、という手応えも半面感じております。社会福祉学科からは以上です。

2008－2010 年度における浅野ゼミの教育GP活動報告

浅野 健一（メディア学科教授）

鵜飼先生が、先程、5学科はそれぞれ独立王国だと話されましたが、メディア学科はゼミごとに独立しているところがあり、学科全体の報告はできません。学科全体で取り組んだことと言えば、卒業論文のテーマを集めたり、講評したり、まとめたり、ゼミで卒業論文集を出したり、チューターを置いて実施しました。社会福祉学科の報告を聞いて素晴らしいなと思いましたが、メディア学科はそれぞれのゼミできっちりとこなしているということで、ここでは私のゼミでおこなってきたことを報告させてもらいたいと思います。

予算が下りてすぐ、2009年1月19日、立教大学社会学部の服部孝章先生、報道倫理の専門の方ですが、服部ゼミと討論会を行いました。同志社大学の学生がいくつかの捕まるような事件があった頃で、大学名とか21歳の神戸の大学生の大麻所持事件とかラグビー部の関係とかそういう実名報道は必要なのかという論点で討論しました。立教大学は実名主義の立場に立ち、受験生にとって、そういう事件を起こしている学生がいる大学名や被疑者の姓名は「知る権利」の対象だと言う。立教大学は理論武装してきていて、こちらは社会復帰、更正の立場から名前を出さない方がよいのではないかと、19歳の主犯が出なくて20歳の微罪の被疑者が出る理屈がよくわからないということで、原則的には名前を出さない方がよいと主張しました。諸外国では大学名が出たりすることはまずありませんから。日本が非正常ではないかと言ったのですが、社会学部のホームページでは討論が盛り上がったということになっていますが、決裂したというのが事実で、あるゼミ生などは「人間観が違うから、だめだ」「いやいや話しあったら何とかなる」と。死刑が必要か必要でないか、という議論と似たところがあるのですが、それでも自分たちがハッとするような質問を受けたりしました。立教大学側は力士による暴行事件なども扱いました。稽古中に被害者がボコボコに殴られて、親方が捕まった。その事件を調べていまして、両方のケースを出して、検証・討論をおこないました。

昨年1月、早稲田大学法学部の水島朝穂先生、自衛隊をサンダーバードにしようという本を出されている方で、平和学の有名な先生ですが、そこのゼミと、朝鮮大学校の国際関係論のゼミと両方へ行きまして交流しました。学生たちは一人も朝鮮大学校に行ったことがなくて、「パスポートはいらないのですか」と尋ねてきた学生がいて、ピョンヤンに行くみたいな感じで、びっくりしました。朝鮮大学校と関東の大学で交流している「日朝学生ネット」というのがありまして、その行事と同じ日になって、東京の日朝問題に関心のある人たちが来てくれて盛り上がりました。社会学部のホームページにアップしていますが、朝鮮大学校で交流した関東の学生が同志社大学に来られて交流会に発展して、高校無償化の問題等にゼミ生が関心を持ったり、在日朝鮮人の人権に関心を持ったり、よかったなと思っています。

昨年6月、鳩山政権が倒れた時、沖縄の普天間問題での辺野古新基地問題が大きくなっていった時に、琉球大学法文学部・我部政明先生のゼミに、米軍ヘリコプターが墜落した沖縄国際大学総合文化学部・石川朋子先生のゼミに行きまして、沖縄国際大学ではガマの研究で有名な石原昌家先生も来てくださりまして、沖縄の学生と討論して交流会もしました。基地現地もまわりました。この報告書も教育GPから補助をいただいて発行しました。沖縄の基地を間近に見ながら沖縄の人たちや学生と討論した貴重な機会でした。

浅野ゼミは、1・2年生のゼミはなかったのですが、3年生から院生までが卒業論文や修士論文

を発表して、皆で討論するというをおこなっています。読売テレビの人にも来てもらいました。上級生が下級生に、調査や研究の仕方をアドバイスする。皆で経験を共有する。4年生にはよい経験になったのではないかと思います。特に院生のアドバイザー、4年生のチューターが下級生に対して論理的な能力を育てる、現場に行って実情を知ってそれを発信していくという縦の繋がりが強くなったのがよかったなと思います。社会学部のホームページの他に、浅野ゼミのホームページでも実施したことをアップしています。卒業研究のまとめを、教育GPからの補助をいただいて発行しております。教育GPでは2年近く旅費を支出していただいて、報告書などのまとめ作業の補助もいただいて、今までにないゼミの活動ができたことは大変感謝しています。来年度からなくなるのが残念な気がしますが、本当にありがとうございました。

産業関係学科の取り組み

阿形 健司（産業関係学科准教授）

産業関係学科の阿形です。前半で学科の取り組みを紹介して、後半で成果についてお話するつもりですが、前半はともかく、後半は学科内で話し合ったわけではありませんので、私の個人的な見解ということでお聴きいただければと思います。

（スライド 2 枚目）産業関係学科では、教育GPの採択が決まってチューター制度が発足する際にどういう風にチューターを活用し、どの科目にチューターを充てるかを検討しました。「ファーストイヤーセミナー」に充てることは学部全体の共通方針であることを前提に、1年生の秋学期と2年生でどうするかを検討しました。その結果、1年生秋学期に「産業関係基礎論」という必修科目がありますので、それに充てよう。2年生では「産業関係論(1)(2)」という必修科目に充てようということで、チューター制度が本格的に動き始めた教育GPの2年目に対応しました。

もう一つは産業関係学科の特徴ですが、3年生がIR委員を担っているのでIR委員をチューターに読み替えようと考えました。7年前から、3年生が各ゼミの1年間の学習成果を1・2年生、教員を含めて学科構成員全員の前で報告する、「学生研究報告会」という行事を実施しております。その報告会の企画・運営を担う。もう一つはおそらく40年前から学科で発行している『Industrial Relations』(IR)という雑誌の編集を担う。この二つがIR委員の役割です。IRは、教員のエッセイ、1・2年生の学習成果、3年生の学習成果とゼミの紹介、4年生の卒論の題目と就職先などを一つの冊子にまとめたものです。

実際にやってみて、1学年を6つに分けて小クラスで実施している「ファーストイヤーセミナー」はチューターの出番があるのですが、「産業関係基礎論」や「産業関係論(1)(2)」のような100人近くを相手にする講義科目にチューターを充てると、その出番をつくるのが難しいことがわかりました。「産業関係基礎論」や「産業関係論(1)(2)」でも担当の先生に小グループに分けて討論するなどの工夫をしてもらったのですが、そればかりを15回やるわけにもいかない。チューターが半年間ついていても、小グループの時には活躍の場があるけれども、全体で講義する時には難しいと反省しました。

そこで、今年度は「産業関係基礎論」、「産業関係論(1)(2)」を外しました。1年生には「ファーストイヤーセミナー」だけを充てました。「産業関係論(1)(2)」に代えて、2年生は「産業関係文献演習 I・II」という通年で同じ先生に担当してもらって6クラスの授業に充てようということになりました。最初からこの授業に充てなかったのは、いくつかのクラスを嘱託の先生にお願いしている関係で、チューター制度には馴染まないのではないかと懸念があったからです。それゆえ2009年度は充てなかったのですが、今年度やってみて結果的には小クラスの授業なので「文献演習」ではチューターの活躍の場があったかなと思っています。

（スライド 4 枚目）次にこの3年間の実績を数字でみておきます。3年間で卒論幹事を除いて延べ88人にチューターを担ってもらいました。そのうち3割が重なっていますので、実人数では64人になります。ホームページに掲載されている「実施体制」によれば、学部学生の約10%の人にチューターになってもらうことを想定していますから、1学年90人程ですので数字の上では達成できているように思います。昨年度の「ファーストイヤーセミナー」に2年生が7人名乗りを挙げてくれたのですが、そのうち4人が今年もチューターをやっています。重複する人の中には88人のうち5回数えられている学生もいまして、熱心な学生は何度もチューターを引き受けてくれるという現状

があります。ここまでが実態報告です。

(スライド 5 枚目) 成果と課題について、私もこの2年間「ファーストイヤーセミナー」を担当して、チューターに入ってもらいましたが、受講生は私の話よりもチューターの話の方をよく聴きますね。目の色が違う。先程の報告で鶴飼先生や空閑先生も同じことを指摘されていたのですが、受講生の真剣さが違うことをひしひしと感じました。ですので、チューターが的確にコメントしてくれれば、受講生にとってよい効果があるだろうと思っています。

チューターにとってはどうかというと、「来週はこんな授業をするから、これを読んでおいてね」というと授業のために準備もしてくる。当日コメントしないといけないから講義や1年生の発表をよく聴いています。チューター自身も勉強していると言えます。

ただし、もともと優秀というか積極的な学生がチューターに応募してくる傾向があつて、もっとこういう活動を通じて成長して欲しいと、こちらが思っている学生は必ずしも応募してこないの、幅広い学生の成長という意味では広まらないかな、という気がいたします。その一方で、一部のチューターには、無断で欠席するという不届き者もあったように聞いていまして、これは逆に1年生に悪影響を与えるなど感じました。こういう事例をみると、自由応募制がよいのか、教員がふるいにかけてチューターを選ぶのがよいのか、検討の余地があるかなと思いました。

(スライド 6 枚目) 手前みそで褒め過ぎなのかもしれませんが、「相互チュータリングの是非」については、問題はあるのですが1年生も先輩の話も聴く、先輩の方もコメントしないといけないから一生懸命に聴くということで、一定の効果はあるのかなと思います。

「導入・基礎・創造の4年一貫制」は、鶴飼先生によるとよくないということでした。最初、今回のレジュメを作成した時に、ここには「プロセスを踏めたかどうかは曖昧」と書いたのですが、直前に「実現した」と書き換えました。どういうことかと言うと、「ファーストイヤーセミナー」には導入教育の役割があつて、高校と異なる教育体制をもつ大学の教育に慣れるという側面が大きいと思いますが、少し上、1・2年上の先輩が授業に入ることによって、その目的を達成しやすくなるのではないかと一つ理由です。基礎はあやしいですが、創造の側面ではIRが一層充実したことが大きいというのがもう一つの理由です。

従来1冊で発行していたIRを、教育GPから予算をいただいて発行するようになって、2分冊にいたしました。もともとあつたIRに加えて『We are SANKAN』というタイトルの冊子を新たに発行して従来のIRを2冊に分けました。昨年度から、IRを卒業論文特集号として4年生の作品だけに特化しています。データベースに載っている全ての卒業論文の要約・キーワードと、各ゼミの優秀論文を全文掲載するというにいたしました。それに加えて教員による講評も載せています。これは創造という点でいうと、下級生にとって先輩たちが研究した内容を冊子にしてみえやすくすることによって、「卒業論文はどのような風を書いていけばよいのか」、「こういう風に書けばよい評価をもらえるのか」とイメージするための材料として役立つのではないかと思います。『We are SANKAN』には教員のエッセイ、1・2年生の学習成果と3年生のゼミ紹介に加えて「学生研究報告会」の結果を掲載する。このように、ちょっとお楽しみバージョンの『We are SANKAN』とお勉強バージョンの『Industrial Relations』に分けることができた。これはひとえに教育GPから予算をいただいて実現できたことです。導入・基礎・創造というプロセスが繋がっているかどうかはわかりませんが、上級生がやったことを下級生に伝えていくという契機は十分に作れたと思っています。

最後に、「学生による教育評価」ですが、教育GPのホームページを読み直してみると、これは学生同士の評価だと書いてありました。まず「ファーストイヤーセミナー」や「産業関係文献演習」においてチューターのコメントは受講生によく響くことが挙げられます。また3年生の「学生研究報告

会」では1・2年生を前に「こんなことを私たちは研究しました」と報告するのですが、今年は1年生から質問が出た。その質問にきちんと3年生が答えられるかどうか、という緊張関係の中で、自分たちの報告を客観視する機会も設けられています。1・2年生は、「上級生はこんなことを研究しているのか」と思えるし、3年生は、自分たちが報告すると下級生から鋭い質問を投げかけられて、「ここは足りなかった」と反省することもできますので、学生同士の相互評価は一定程度実現されていると思います。

「学生研究報告会」は産業関係学科では以前から実施していることですが、教育GPのおかげでチューターという位置づけを得られ、発行する雑誌を2分冊にする財政的裏づけを得られたことは有難いし、従来おこなっていたことに対して一層の深みを増すことができたとは評価したいと思っています。これで報告を終わります。ありがとうございました。

意味のある「導入教育」を目指す教育文化学科の試み —教育文化学基礎演習Ⅰの取り組み—

楊 奕（教育文化学科准教授）

教育GPのホームページで「創造的学力」という言葉を知って、とてもユニークで、学生にとっても大きな意味のある育成カリキュラムだと思いました。本日は、創造的学力の第一歩としての導入教育を取り上げて、「意味のある『導入教育』を目指す教育文化学科の試み」について紹介したいと思います。個人の経験を踏まえた発表となります。

創造的学力は、初年次中心の導入教育、2・3年次中心の基礎教育、4年次中心の創造教育が一体化することによって初めて実現できると考えられます。中でも特に導入教育は創造的学力の第一歩として、その成否は、その後の教育に大きく影響すると言えます。初年次の導入教育は何を中心において考えているのか。基盤を、どう固めるのか。教育文化学科の場合、導入教育は主に「ファーストイヤーセミナー」及び「教育文化学基礎演習Ⅰ」によって行われます。「ファーストイヤーセミナー」は春学期に、「教育文化学基礎演習Ⅰ」は秋学期に開講します。これらの授業は通年で学生に教育文化学の基礎的な考え方、今までの高校の学習とは異なる大学におけるアカデミックな研究方法についての導入段階の指導を目的としています。本日は、私が担当している秋学期の「教育文化学基礎演習Ⅰ」を中心に教育文化学科が導入教育において、どのような試みを行ってきたかを紹介したいと思います。

「ファーストイヤーセミナー」と「教育文化学基礎演習Ⅰ」の狙いを説明します。「ファーストイヤーセミナー」は二つの能力の育成を目的として授業を進めています。勉学態度の養成、自習的学習方法の習得、その中で自習的学習方法の習得について、図書館の利用、資料・データの収集方法など、これから必要となる方法を身に付けさせる以外に、教育に関する基本的文献の読み方を中心に文献の読解力を求めます。これまでの読み方とは異なる、もう一つの読む方法、問題を持って読む方法を提示します。何のために読むのか、自分なりに考える材料のために読むのか、何かを知るために読むのか。主体として読むことの意味を、文献をとおして理解させます。本には必ず思考力を鍛える大事な要素が含まれています。本をどう読むか。創造力、思考力に先立って、本をいかに読むかが教育の導入教育の第一歩だと考えています。

「教育文化学基礎演習Ⅰ」の科目の狙いですが、3つの部分を挙げています。(1)教育文化学に関する確かな基礎知識を習得すること、(2)教育に対して幅広く学び2年次以降の研究の見通しを立てること、(3)グループワークをとおして多様な意見をまとめる力・相手にわかりやすく伝える力を身につけること、を主な目標として挙げています。こういう目標を実現させるためには授業の中でどのようなことがおこなわれているのか。次の2つを挙げることができます。教育文化学科では専任の教員による専門領域についての講話をおこなう。もう一つは、教育をめぐる様々な現代的課題について、グループ別に課題を設定して研究・討論し、その結果を発表する。最近、学生は他の人の話をよく聴かないと言われていますが、実は議論ができるということは、他の人の話をいかに注意深く聴くかということにもよります。秋学期の「教育文化学基礎演習Ⅰ」では、聴くということを中心に、アカデミックに考えることはどういうことかを理解することを中心に、授業をとおして進めてきました。専任教員たちは自分の専門・研究の成果だけを語るのではなく、自分のテーマ・研究に出会うまでの道のり、苦悩、思考過程を話します。これらを聴くことにより、学生たちが教員の研究への姿勢や研究に対する強い信念を感じ取って、ある程度、向学心を養成していくことに

繋がったのではないかと考えています。

この二つの講義で行われる様々な取り組みですが、私たちが1年間の導入教育をとおして学生たちに何を求めたいのかに尽きます。簡単に言えば、知らないことを知るようになる。もう一つは、知っていることをもっと深く知るようになるにはどうすればよいのか、ということです。導入教育は、この二つのことの達成によって、初めて実現できるのではないかと考えています。ただし、それを実現させる前提として、知的関心を持たせることが大事で、そして、アカデミックに知る手法を身に付けさせるということも大事ではないかと考えます。知的関心を持たせるということはどういうことか。知的な世界、新鮮な世界に学生たちを招待する。学生たちに知的関心を持たせるには知的関心を示す手本が必要ではないかと思えます。その意味で、教員の話はとても有効でよい手本になったのではないかと思えます。研究に対する熱意は学生たちにも伝わったと思えます。もう一つの、アカデミックに知る手法を身に付けることとは、具体的には読む、聴く、話す、書くということを総合的に行うことです。一見、言語学習のように聞こえるかもしれませんが、この四つの能力の育成がアカデミックな思考にも同様に役立ちます。春学期を読み中心に、秋学期を聴く中心には置かず、書くこと、聴くことの基礎を作り、自分なりの知識の蓄積と構成の方法を考えることが知ることに繋がるのではないかと思えます。その方法は様々ですが、二つの具体例を挙げて説明します。一つは考えるための一定の「型」を提示し、それを個性的に活用させる方法です。考えないということは、考える方法を知らないという場合もあります。方法を知らせるには最初、一定の型を提示することが有効ではないかと思えます。研究方法の中で、いろんな型があります。社会教育、心理学、歴史学、それらがどう違うか、教員の話聴いて、少しは理解できたのではないかと思えます。

もう一つは質問の仕方です。フィンランドのメソッドの本の中でまとめたものですが、よく授業の中で学生たちにこういう風に聴いています。質問をすると、わかりました、わからないという答えが多い。なぜわからないのか、どうすればよいか。聴き方から始まります。それはなぜとか、そもそも何なのかということを、聴くことによって論理的に答えてくれるようになるのではないかと思えます。もう一つは、何を言いたいのかを常に念頭に置きながら考えることが大事ではないかと思えます。本を読んで、その中で知識を吸収するのではなく、まず何を知りたいのか、何を言いたいのかを常に考えなければならないと学生に伝えています。学生の中の相互評価は、毎回の発表の後、学生たちに、自分はどう思っているかを書かせました。

今後の課題について、以下の三点をとりあげて、説明します。

1. 質問しやすい環境をいかに作るか。グループ活動では活発なディスカッションが行われますが、質疑応答になると発言しない。発言する学生がいつも決まっているのは残念だと思います。多人数のクラスでは、いかに発言しやすい環境を作るか。なぜ発言することが必要なのか、授業の中で学生に説明しながら考えなければならないと思っています。

2. 学生のコメントをいかに活用し、さらに、学生の学習にいかに繋げていくか。学生の書かせたコメントは大体的場合、感想のままに終わることが多かったのですが、自分の感想・意見を、先生たちはどう受け止めているのかを知りたい学生もいるし、あるいはフィードバックや効果を期待する先生もおられます。こういうコメントをこれからどのような形で授業の中に生かしていくか、先生たちとの話の中で検討していきたいと思えます。

3. 同志社大学の学生の特質を生かし、その質を高めるためには、これまでの研究成果をいかに利用するか。教育文化学科では学生の学びを中心に置いて、教育に務めることを学科の方針として掲げていますが、そういう学生の学びの意欲を喚起させるには、どのように向上させればよいのかを考えるのではなく、そもそも、なぜモチベーションが必要なのか、それが作用する要因は

＜卒業生アンケート調査＞も毎年、卒業式当日に実施しています。同じフォーマットで実施しているとケースが増えてきて、今年の第3回調査を終えますと、累計1000 ケース以上のデータになり、本格的な分析が可能になってきます。回収率も9割前後を維持していますので、信頼性の高い全国的に見ても貴重なデータになっていると思います。詳しくは、すでに出版されております『第1回社会学部卒業生アンケート調査報告書』と『第2回社会学部卒業生アンケート調査報告書』を見ていただきたいのですが、どのような学生が入学して、4年間の課程において、どのように学習し、あるいは学生生活を送っているか、そしてどのように就活をして自分たちの進路を決めているか、すなわち AP・CP・DP の達成度を測ることが可能になっています。これまでの 2 回の調査によって明らかになったことは、それぞれの学科が非常に明確な個性を持っていることなのですが、それがどのように卒業生の進路に活かされているのか、第3回調査のデータによってさらなる分析を行っていく予定です。

今後、予算的に同じ規模で続けるのは難しいと思いますが、成果を重ねていくことで、また外部資金、学内資金をいただいて社会学部の教育が良くなっていく方向になればいいかなと思います。もう一つ最後に申し上げたいのは、この教育 GP には、大学院生の方も、卒業生アンケートの実施と分析や、3・4年生向けの授業のチューターとして、またアカデミックアドバイザーとして参加してくださいました。同志社大学社会学部が教育研究のコアにしている価値を実現していくうえで、大学院生の皆さんが非常に重要な役割を担っていることがよくわかりました。今後、学部と大学院の連携ということも、重要な課題となるのではないのでしょうか。そのことを申し上げて本日はこれで終わりにさせていただきます。またこの後の懇親会でどうかゆっくりとお話いたしましょう。長時間、本当にありがとうございました。